

增補名古方角抄 下同錄

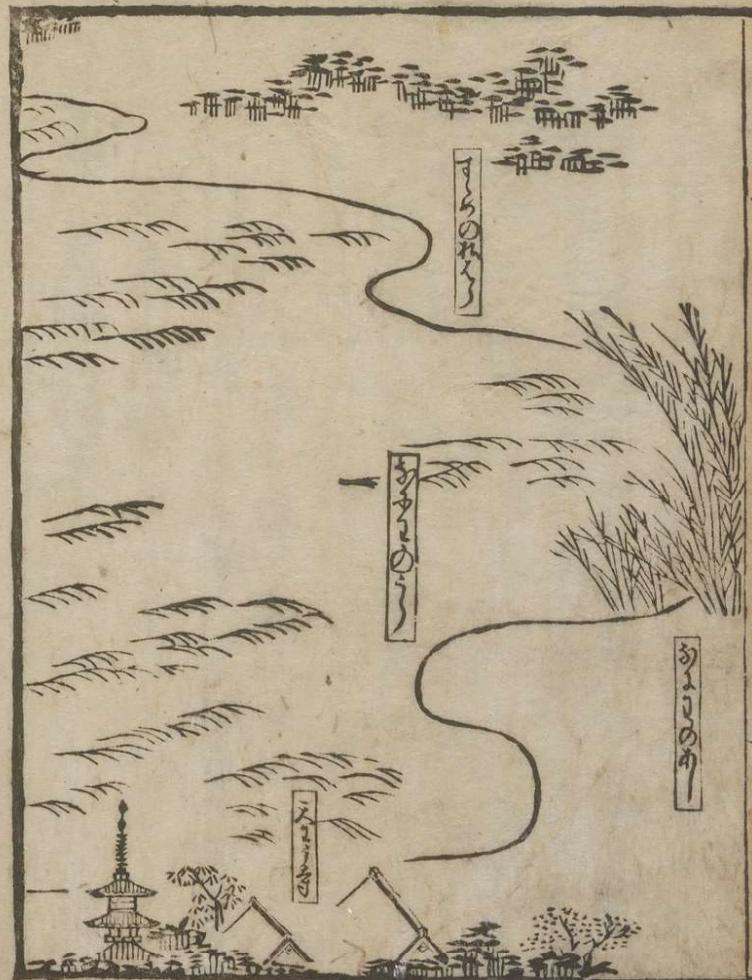
榜律初丁紀修八十日漢路十日
酒波十二日鑽波十二日經修十二日
圭佐十二日更飛十二日榜广十二日
備前十四日備中十五日酒後十五日
安藝十五日因湯十六日長門十五日
老前十七日老後十八日大渴十五日

日向 十八百瀬广 十八百瀬方 十九百
 瓢後 九百自肥前 九百自肥後 九百
 七波 九百自對馬 九百舟波 九百
 舟後 九百自鷦馬 九百周懸 九百
 倭脊 九百山雲 九百石見 九百
 隆波 九百五授 九百越前 九百
 和賀 九百絆登 九百越平 九百
 戯後 九百佐波 九百下田嶺九

名本方前鈔ト

桜津圓分

桜津圓分京より東半河内より西より
後漢書
 離波 沖あり西と南の海小をふあり
 桜浦 沖ありノアノ内於ありようち々とニテ
 桜浦 沖ありノアノ内於あり
 海漂 入江姓江浦浮津漆波まき
 故文漢寺龜井
本多義高
 しと美ノ被毛即人離波乃前久ノ是其
 秋そと飲食の事也水離波乃風也
 宇波 連月若梅松並松林故因名
 千鳥居之外一之也



水柄橋 江難波乃小より橋をう
古之江難波乃小より橋をう
波多橋是を難波名之不主守の小毛里之後
川ノ毛里あり波多いもと橋根ノりくひ
川ノ毛里ありばやよ難波ノルモの山中
鳥羽よりふとくれもまもんかあうるる
あり又朴傍と云ふち一川底大穴岩等
ウスアリ

鳴尾洋松沖葉香山耶敢ノ出
田蓑鷦國鷦育也之主のあいのいの

うち乃海島之海名からて海成村といひ
ええ海底よりこうちもとすゝくあうすまうえ
き今國の山よりはれりよひあへれりすと
御津松原村は六あく八かと云ふも
古之名を松原と連取波多ら別と云ふわい従
る師淡を江と同名有 小松崎 薩摩
橋か寺ノ里と取波野乃内あり
新規大崎の山師の淡の松のとちく次公也
後高船入江墨松小崎を墨小崎と置其東人
而を海にむかひ波もへば波のり淡波も
ありの林立水面より松原と云ひて
此方の海ありもむりわき松ノハ島
て後高船も墨あつむり波すより和泉

場の法をもとよりあり(せんじゆうり)御飯と
内中のものなり

さへ文あれ筆を取れども此風ひをも傳之
安の聲 松木 ありのまゝすまゝに然聲の
二乃玉みゆり 安隱ノ市邊にて有家澄
新御殿主
千代波、ひわの傳説もう從てね氣概也
長井浦 墓 流汎江小野村
義成
翁もよみてさへとどかの獨もびし明やもとくを爲
ゆくに流汎小野のちやまといく種のまくらさき
壹里小野 ほくろくよりひくらり
三三は沖
諸名山 さくら まくら 沖原川海 沖浦
漆波 さくら 沖原川海 沖浦
妙乃木あり

松濤
川の水は常に清潔で、海の波の音と風景が美しい。
萩原いよいよ船の乗り手となり、奥から入りやなれか
れありありとおりゆくへて、海にあり大國乃
義とひあめり十所ばかり走る。因まえ奉り

松毛山
水のすれ流りをもくと川をうちさせし
武庫山 浦橋渡川海川をうちりを因志
高さりあいかづらうちなり
後撰上
かくはくをめぐらすにまことせひよき若松人
青眼山のとゆむのゆ月をすく夜
龍石山 お湯浦有いあらうらうりゆよろれ
見くらいかの奥あり更地りくらひありせ
よ湯乃ゆくよ木えあら六里うりゑ乃

おもむろにわざとありまくよひゆうゆうことを尋ね
うりふり見つめ 大藏三郎

大賦之經

前記の如きの外、此處に於ける風景は、
小舟池、宿泊よりかよ池、大通の宿泊りを有り
鳴尾乃木の里、伊豆松原あくち
うそばく

かとやう思ひれどもあらへ根あら木せり
お正月 小さくともありてありえり十八所
みあり 小清もとてふるうらのまをも
小清もとてうちむをひて うちより高めり
そそくへりて海をよどむをすに重
をすよ國ふるをされと蘆のねぐとてあり
翁庵ゆゑとあるを歎仰しりて花のむか

此の秋の花月東都傳あひをかうとおは
御の御花の花月松原のうちあり秋も天水の
すまほりありあるあり海さきのあらあり
つとひあり
吉永ト
せひあひゆりえはの園の花月東都傳をかうす
吉永春後

里田
里田里小曾川浦漆津森山
山の里小曾川浦漆津森山
由来同宿里田男の塚とのあめ中者モ里
ナリ千八所の木ひづき人せもの家と
篠原里小曾川浦漆津森山
塩河海をあり海たよりあひてから共床
ちよよどみの浜とすあひてからひしにま
ぬくとくらひまがれあひてとおらく
やうりもくへかねりやらり生田尾也
をあり川を布引内湖のかれあり
後撰
つまひのあ湖のまゆらの湖の絞を新
因
因のまゆらの湖のまゆらの湖のまゆらの
布引湖生田の森よりわいわくとさりよ
らりもくふれそり

今本巻上
今本巻上
山川多厚乃小曾川浦漆津森山
新篠原里小曾川浦漆津森山
塩河海をあり海たよりあひてから共床
ちよよどみの浜とすあひてからひしにま
ぬくとくらひまがれあひてとおらく
やうりもくへかねりやらり生田尾也
をあり川を布引内湖のかれあり
後撰
つまひのあ湖のまゆらの湖の絞を新
因
因のまゆらの湖のまゆらの湖のまゆらの
布引湖生田の森よりわいわくとさりよ
らりもくふれそり

蓮乃池

若席うり三十町うちの勝川の宿
ありとおり湖うちあり又鷺沼有江
太刀道にすらまでもぬるを候之
廣田川の宿前より廣田川の宿より

中島乃宿長洲の宿とてあり

人をいわゆる鷺沼の廣田の宿あると名
いふとこままで事のりへはおほきのとる
お尋ねがよかつてあるとの事くより方とも
此守乃宿を中島の宿へわらひてはるの宿
立場ぬ事すまことのあんせも長洲の宿也
は不浦の初傳すとちがひのゆき次
源慶海浦宿と云ふ山並木の山の邊
まの山の邊りあらそくまの山の山の邊り不移
まの山の邊りわの松川のあら山不乃



海のれ渡りの視りの済度のうれやまの渡
船のひやか

扶桑國上
の波をきよと無くすの波を須度のうれ
須度の里を若度よりも里あるありあり
高きり若度と十八里也と能と松と里下り
も漢色としむと清風ともて海上ニ里下り
波度乃は行ひとすと宿よりも波さる
うちわらふとすと有度を西漢よりも
よさのまくあつてよもと須度某
國度とくも今もとくまのうりとくち
うよひとく波度たり

橋列乃は度のまくしもと橋度のうくと
不と須度のやくにまのり一方とくとく
少すり海なりもくとく

次第見とだすと見すとくとくとくとく
えれり山湯たとけとくとくとくとくとく
あくとくとくとくとくとくとくとくとく
あり

紀伊國分

京よりも背くもと波度和波とせり紀伊
乃巨勝とくとくとくとくとくとくとく
乃勝村春度冬度とくとくとくとくとく
紀伊國勝の冬とくとくとくとくとくとく
冬度の冬とくとくとくとくとくとくとく
うちうりげねりりむ野山三里あり和波
初波へうりりうらうらうらうらうらうら
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

此の波といふ所あり
此山嶺名く、すゝ有之京より
東に十丈あり、おほとしを小あり。河内境
は、もゆるて、約りや、其の處と有る。作
松打とぬる月と見ゆ。より。是連作
金剛三味院より奥の院へとまわり皮院
より南よ玉川とひよ橋を奥の院を西高
きり又玉川のあそびのいき。いこく
あひは師もせんもみるは麻連寺奈
乃とひだり。一けむ十首のにて、此
うりうり。

住すらとくとくかくちの壁へおのれをさ
せられども身とあとめとれど
萬代津有曉風せ外の地へあり。

熊野より順々あり、あひ海あり。岩代、和す
は、次よかとねり。
波波代や、波代を越て、あひ波せん、波とやね波との波
由波の内、波波代よそ。そく、由波波とよそ。大
波千毛、水毛もあり。
鳴れと、わらかくもとをえり、とがめのなす
る浦、伊勢より、是の内、波の波の波の波
立波、波代よそ。是の内、波本因縁波と、乃波
波、波代よそ。是の内、波の波の波の波の波
波と、波小道、菊松、波の花、自教十事
を、ゆかりあひあり。
秋風の吹と、あひ鳥の花、波のすり

の如くどの漢字も見る所の如き爲
和泉丹波より至はれ
者眼見子を因縁とする

有明月子高風萬古流
天風吹破了此洞陰陽
崇山嶺是小舟雲和浦有誰乃主子
曾我松林

我の心を以て人の心を察する事は出来ぬと云ふ
其の津 異なる事も古松主がおもひて
山川雨陽

おまへ御有り事は、
達保の二姓相争ひ
之無間の済乃済也。おまへ事は、
御有り事は、おまへ事は、

山川嶽花取事より

卷之三

卷之三

蘇軾もまた其の後も常のまゝ月夜胸次観
新康山
南康山のうへとて其名氣はふかと實もれ
南康山の山渺茫とめふといひあり權を主
然也と紀序乃ちあひのとてあり
いはれどいはれどもよつてうち爲うむがうの
はうち山城のふの小峰へ入れば
妹背ひそと山せよわくてひのけりそと
川をり一舟のすらり
妹背ひそと山城のふの小峰へ入れば
妹背ひそと山城のふの小峰へ入れば



かうるは能の祐の本宮の廟のうちには才や
接う教石ころいわくのめいせきをあらえむか
坂ノ浦 あ圓ノモトカヒトセシマヒタニモテ
キヨリ千ニミテモテルヒキモテ中古ニテアアリ
アラクヘ御歌の間ヒソヒソアハ海も水も
氣無有ありモア難かくより海よりあは
浦西のみある浦 あり

堀野

山 鶴井 痘 落 宮 佐 佐

守 佐 佐

小 菊 田 と く よ や り
七 東 洗 箱

大 波 海 破 わ ち ら か い 海 ち ら あ り
東 京 基

阿 波 國 分

久 波 山 碓 丸 小 稲 大 筒 門 い づ

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

大 波

山

海

波

山

海

波

山

海

波

山

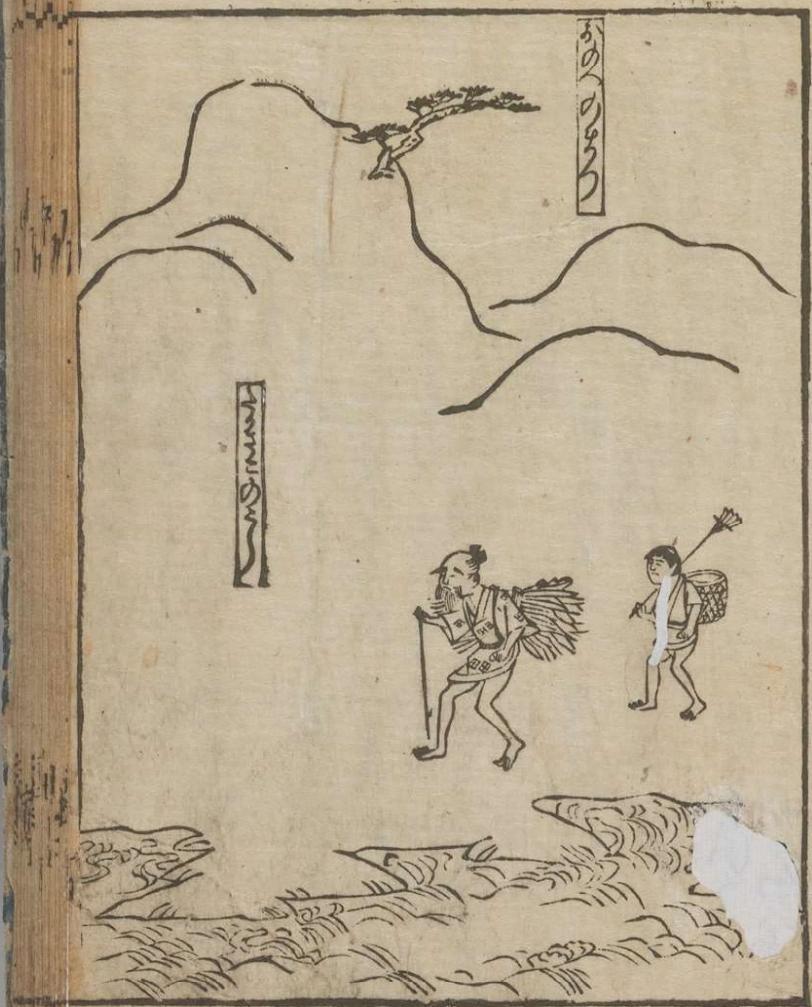
海

丹後より移列へ行ひあまといり
冬至の日有塙室山施設より
免稅之ものと申すれど我公室一月伏見

字那後集

播磨國分

播磨國分
英作をうそとまわらひふらわらわの梅はみ
うちうり西のり二乃石ノ山ノ木ノ松より
玄水はまくこととすを須佐と大曾根と
中多うり秋も秋も秋もあらうりまわせせ
乃さうひとよろむ前と大曾根の名をあ
四石浦 海津 小浪里 客忠金 松原 月
方 かのじ人凡揚くとて大曾根のうす



小波中に池有とれどもあらそり下る
まつて水を飛ありて下りけり水を下り友が
うひきのうすとくわらわすとくはと逃げの
傍無里沙固汀浦市下もせうりあ
りかうくらむらのりのりあ
壁の雲原山林旁をとめとあるのまく出るまへ
進くらむらのからまくらむらとねねてとくはと
宮浦内海入浦大水泊らめ乃をひり
波影川の宿よりひりへくらむら
よ砂山嶺尾上浦淡滌松楓宿
卷之三
廉義
立波瀬山のあらゆるものと然るを如くさん
立波瀬の松竹梅をいわば人君のものとての爲も

銀山宿あり海たり川乃宿ありあり
松あり 及布村とからより

多麻川 やちあくされそりやすすと
いふ山寺有り

武吉草湯門石大木よし御淡路鷦

鷯出海幸むのゆかひ二見浦後風
丹後よりあり

終乃前松重ノ松瀬淡浦ありあり

小鶴牛糸車ありあり 夜琴代は

あらわりえち岩の経

古傳中山 はひを傳中傳あり圓さへかり
古傳はえとげん乃尾を傳て坐而傳

緋流圓分

古傳牛糸車ありあり 夜琴代は

えとげん乃尾を傳て坐而傳

古傳中山 はひを傳中傳あり圓さへかり

古傳はえとげん乃尾を傳て坐而傳

乃えりも而已後を二河もありにと舊
少ありふとすてもりへねしと有細河
ち金糸車ありとくらへ腰ありぬれと古傳はす
ゆありとひが車幸のゆかひのものありと

古傳紀絵の酒ノ因思有之

二方郷板金の持宿を海道ありとゆは
金糸車ありわざりしきあゆせよより 東家經
小鶴也すとくらへとくらへと古傳はす
御南の山大和丹後より因思を書くと城又

長岡山 嶺あり

キモの並行いとくと山の芳巣ノ松風

丹後圓分

古傳はえとげん乃尾を傳て坐而傳

病瀆外室壁を病を尾々より、尾々より
西よりを南のりからよ南海より
まし病では身を病のういのを身にせび
病瀆山よりの瀆ふらぬかはてあから
裏瀆橋、府中へと奥列れと圓石をもくと
眼瀆船うち海の川み瀆こぞくの橋をひよ
眼瀆瀆、ほの圓とそくへ引瀆をあせれ
の尾たの瀆よひを瀆あれ

安藝國分

小毛山南を海より瀆くまきの尾毛をもる
西よりをねり里をそりて瀆のたぶを
越て女日市とりて而翠川名原
安瀆奈々子乃社檻もく枝鷺のゆ庵公室を守
あり武社ノ百八十石乃四廊堂之大倉殿

あり波立えをと即ちひよまぐすとよろ之未だ天
筈あまかんの瀆とソリの岸井瀆のひあく城の
内神石と下ノ瀆ととくはせあわりのり
よりいの瀆と下ノ瀆ととくはせあわりのり
の瀆と下ノ瀆ととくはせあわりのり廉がねいの
よあひく御樂の月十七日あらりのり
安瀆有之舞東までと有り
佐伯山をあくらめあらひ安瀆かすの井
まへ佐伯山ととく

安藝國分

安國山よりより瀆とよまくりあへ
方といふ事あり小山もの城てとを川と
すゑあり國瀆ありをそりあむ太ふを
海毛を安國のり

國の事は少く、山を越して鳥居へ立つて、やがて

卷之三

卷之三

卷之二

大鷦子良瀬、勝石浦文宣校
寢テ世俗ノ如クドクノ用ト之
家ノモアシムノハ貰ル也トテ
玄秋ノ萬葉詩、落ノ堂ニシテ海ナメ
出テ之道ナシ、其ノ室地ナリ

卷之三

安民移尔世傳よあんのひといひと長門乃
國乃小からぬつとももさうくわり
えはくはくの年と傳へるがゆめの松家
を漁鷺置えど之麻中わたりを居の種
ちも高きりあらへまほほの風はるは
て御鷺を千鶴の二珠と納められ

まひの海とより仲が湯瀬あり奥は
都間軍門可安いをもす有種の間とよて長
門海は所そぞれをもす有種の間とよて長
海以東海流とすと門可安をもす有種の間と
里の海と塩あひ漲をひくとどきり之
ゆ作門可安地より有之毎年十二月立春ま
よ和布と刺繡り海をもろんむねくい金
赤白間の子の麻糸にて二三色をえを施
乃文者之波うそく取れ海とソリの龜ふと
くよハ楊木の木之北系多秋の眺めあり
多の波うそく取れ海とソリの龜ふと
くよハ楊木の木之北系多秋の眺めあり

西海道九ヶ里

其の四

紀政 那よりも深く良深と云ふ霞と小倉
乃あひてあり

是よりて我ら東洋ノ事かくわざと霞は深
霧がり田といふものひて海上に星なり海より
それ入日めよらり

是のもの鳥の部云かられてゆる
紫雲山 有笠法鷹
紫雲山を笠法の鷹の名稱かかね
後の山海をす因名多有之極う岩門
きくうちふのり
穴あま あらうり社便ちかく微乎ひあり

考後より

新古今
作紙

梅浦天皇の御時和氣清れと字佐之より
あり終て又其時達志一翁の所に秋

う乃海意故のとてかくすとぞとぞと

豊後四分

東あき海意あり海より一すは雲うり

難鷹

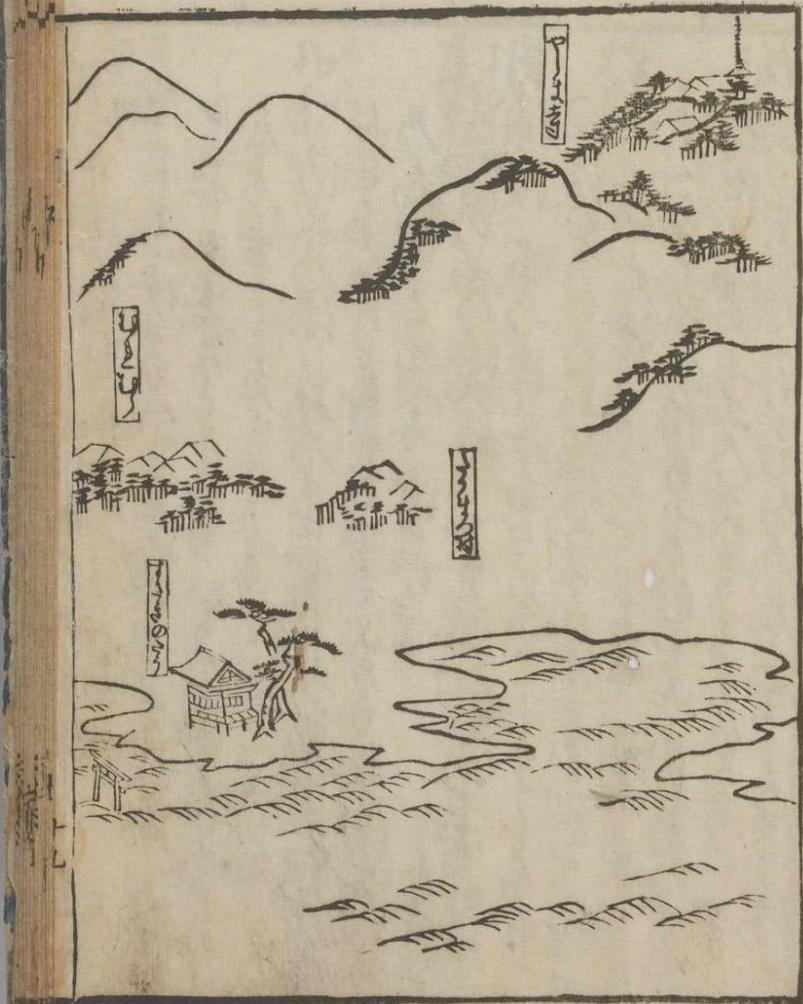
小浦急と云ふらひひひひひひひひひひ

湯乃嶽 府中よりあかり知り在かく清り

大隅四分

風乃森

う乃風の森の様なうあかるきうら



朝氣
夕涼
あれ
うち
ワキモト
水湯のきの
東風と西風
日向圓分

あすのドモトモトの名前をみる
みる
すとそり鷦^{セキ}鷯^{セキ}と云ふありあれば自ら
うとゆふとあ圓^{カイ}今ちうめりゆくせり
きとふとあはす

薩摩圓分

是を名すとくわ

御^ミ江^エ瀬^セとくわすとく所ある
奥^ミ小^コ鷦^{セキ}いとう^{セキ}鷯^{セキ}とくわす

義^ミ夜^ナ我^ガ宿^ス見^ムかとよぢり

義^ミ朝^ア奥^ミの^ノ小^コ鷦^{セキ}いとう^{セキ}鷯^{セキ}とくわす
沙^シけ^ケよ^ヨ金^{カニ}鷦^{セキ}風^ウ

魏武帝集

前文　小ち海うらひへ入海かり而てまづねや
くありをかとよみがり うちの漆とよむや
前文より

水の墨の漆 右の筆はとて下り松原を
ねを海からあらかじめたり又も意味は
乃能形とてへと出でたり
新井良玉上
新井良玉の草書の跡とて後代拾えづらが
肉浦の刻 安川氏にまつり是を小字うるあり
宋海 とてへ宋海へ即ちの尾形和也と傳り
宋海 とてへ大鷦 うちわそりあり 本林集へ通
考一とてや祚の極すとて形りゆうりあ海を
極すとてからキテスモレナシのり
極す 家像よりあるもの居てとて千葉

塙元日月のうちをもとく漢水の代より今固ども
之経ひてうつる嶽と日本とのよりてうつ浦との
所から屬浦とよんで、其の様にてすれど
まじかれてよしとよてえふがゆき本所あるまじ
祐より教あるるの教者と梅庵とよぶもとと
名ふとぞいへ
朱雀を渡りて下りてあくまで海からて右に里北流
あり橋見より
志賀浦はわうてふ東を被るよしのうの也
志賀川のうづ小橋とて海の中道とよひける
くとす方略文殊もよむかのりあがたす利
あんじうれ流とて所もてニ里かり海の中
道をうづくめもあり

秋風に拂ふ此のうきとておとく海の中うち
唐人の名の傳よ承蒙りての景物うきあり
雲のうきを賣すりひてうきあり
かどりのうきはうきのあれをもと繫合さる
香椎湯えおとあうきあくゆありあやめうき有
金のうきありあくねうき
金のうきあくねのえの板のうきてひまく水をそ
葉勝かわすりぬる中右せ活れまら活れ
いふをひす活れすをひすをひすをひすを
あゆのあゆは松を御ちよき松のあゆひす中
え井植者之成定惠人翁はりうとくとく
松原小島も黒てれく白地うきそ雙叶草
うかり勝多らうかうううううううううう
泊くつは後わう被の漆とくとく

松生
生松原西南あを法川を海あり黒あり松多
松原
小島の中右一里あり

松生
じくと生の松原とくとくをわひととくとよ
古流りく生の松原とくとくをく扇の風とくと
産の松將來のりあく松種あゆのひくとく
ト博とくとくとくとくとくとくとくとくとく
三笠山森有之大和國のとく神生湯
ふくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
室浦山はふく松種をくとくとくとくとく
堂とく寧府天水をくとくとくとくとくとく
わすとく我ねをとくとくとくとくとくとく
松生
松生とくとくとくとくとくとくとくとくとく
西放寧府之本丸處於今山ぶ川とくとく

三皇の柱をあらねば林あり天神の靈廟社禮
ありあり小壁門一社あり麻糸の房の邊
あり林のちをとよりうらうらの圍みと
いぢり

川邊をかきまの溪のうちよわせ消ち
淺川とやんのいそがみにあまふれかん業平
若狭山ニ登ひよりひくはあさくすらの原
山あらに墨あり野やあれ花よから
深川もろいゆめかくは赤子の歌よせえり
韋乃橋足をせぬる歌かとも名をよめ圓

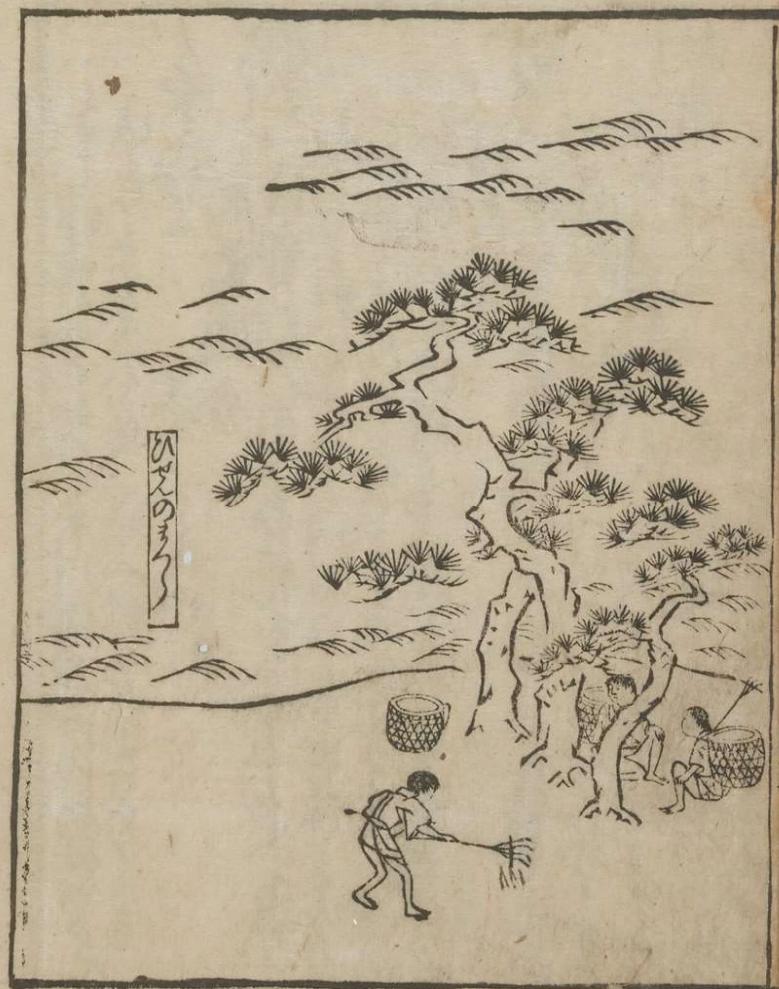
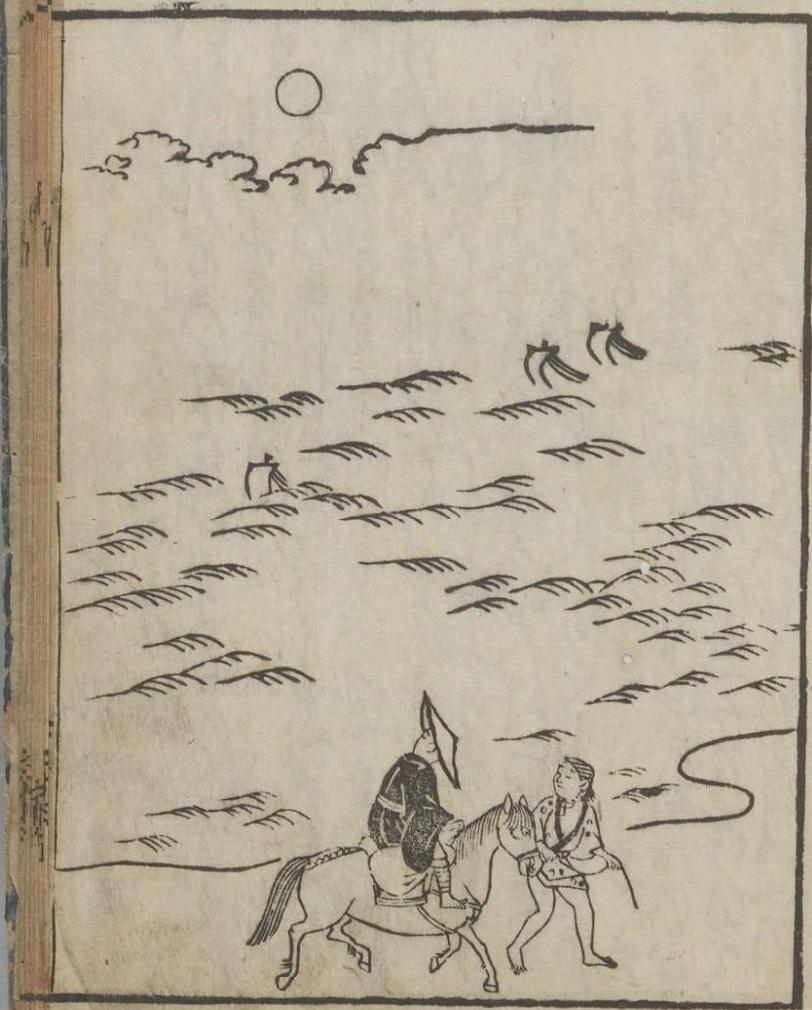
一
東川少半とせ信は流後門とてあらむ
寧廟よりも近づかず此は初使立あり

（後略）

卷之三

賀乃固

句下
名をもて配るよと仍てち載りて配後
乃因ふう配前よへ現生のいとよ不せ之
もいきくあ過一ふ人時のひうえいとあり
松浦山岩川是松浦山を巾振ひ大野宮
とと歎とも口ひばらひよりみ里つら未半よ



五

併かく不當も之はうそとのひに於有私
もあり已知れども、さよ難波店舗をさ
ひて之處乃て成てゆきの事。併かく

近松作人中名十郎の事
蟬の羽の衣と絹と松浦の金の糸を拂はせ
その弓のひき方と神とまことに今も拂はせ
後乃てね浦の方へうそろあわてて又東風
ゆめくらまうりまづり千十のりあへもむら
かくすがれぐる塙入へ大行ニ歎有之松
浦川又後乃てひりたからて川とせん
そよがりば御来林へ大喜夫翁に君火
松浦 貴海 一翁とやく海氏の禮へ玉
うう乃てに暮れてもふらむら行ひて
まゆの聲と笑ふじきけりのひと

右のをひきうて松原を後段の作とせらうん
からもあへりひきにそなへてサニ幕のよ
あへりつてひじとひのひり竹へ付
浮遊を死を生むをかくしてはるありとが終
かくかみあるかとばわらとうひゆうとくらう
ちうらくはねわらゆゑ玉鳴川の石を
黒くらひすまくらひあり

肥後國分

然の勝後の國との國界を定め、其の北は阿蘇郡、南は
山縣郡、西は日向郡、東は肥前郡と定められ、
其の北は筑前國と定められた。この事は、元和二年
の御内裏である。この御内裏によれば、筑前國の
北は、阿蘇郡、山縣郡、日向郡、肥前郡と定められ、
其の北は、筑前國と定められた。この事は、元和二年
の御内裏である。

凡此皆是後漢之書

送故西分
風や吹き方松原のり海と千里少すり小風
おはなりそより對馬(ソラマツ)まともに海
うきよすむと
風が風を吹くて来る所の音が世間で名を失

はるかありよりひて天原と山口と國井川
のうち名をよしとあくへ見ゆ次
越中を同名あり
高木村のそとを高木の義代守と移す也

麻申よりもとよりの後もあり

山法道八十四

丹皮圖考

丹波國分
大山 世俗にかひのふたりまぢり事方
西乃岳とひよそひあり山はたてそれ
えもじよと越後くあらり常人多めあり
ありあらの林へとくとて布をうれせそ
まからあらり里といふる二年二不あら
藝基 龍馬もあらひあり追りて十八个あり
大山はいづれのむけまえを山のあら爲すらひ
新義 おなじにてくる麻乃房義和を名本也とす人
生者も舟役のれど丹波よりかりを多くす
圓石原も舟役ともえりらるると略之
大山 松岩詠の石 楊山

丹後國分

与瀬 海入りう 漢吹漆 小鶴肉小漢

海津等方森東琴

次牛 海人 楊立山 大山

海津等方森東琴
海より千すよまの夢へと變へゆる波よ能わせども
よまの海の内不の海はうひてゆくよまの海が楊立
天狗立 补ひせ九世あらひ事ある君九世あらひ在
いふあり文殊ぶんしゆの以度不と母後の府ふの舟を
あり東西とうざいをさせても是より南みなみを海うみより
楊立やうだいをあらひにこ附つきりりか後ごありのふより
ああ是ことと今爲なくに小楊立こやうだい乃の破色はいろを村むらより
文殊堂ぶんしゆどうをあらひにわくと文殊堂ぶんしゆどうをあらひ
毎月まいげつ十六日じゅうろく來き此こより別べつありあり海うみ岩いわ
寺てらと云いふすありくちくち津つりの詔ほ



出羽へとまほの浦まではあそり未ま
後へと九月乃至て秋を天折るも一打
くわたり終始今け前とえを折めりか
組毎ひきのりよとせし事はあよじ折れ
ねどもをやあり一の枝よこ折を爲すされ
ありと

金舟とあえんとあぬね風よ波音すあら天より立
成相 廉舟とあえんとあぬね風よ波音すあら天より立
達とあらあり幸まのと波音より一里あり
後舟 桜木舟 もうくの舟くりくとくら
浦舟 う舟うもくとくらうりう舟うりう

船舟とあえんとあぬね風よ波音すあら天より立
先舟とあら里 沿共 丹波舟とあら里とあら里とあら
よおれず

舟舟とあえんとあぬね風よ波音すあら天より立
高舟とあら里とあら里とあら里とあら里とあら
海舟と丹波舟とあら里とあら里とあら里とあら

組馬四分

丹波舟とあら里とあら里とあら里とあら里とあら
舟舟とあら里とあら里とあら里とあら里とあら
湖舟と木舟とあら里とあら里とあら里とあら
秋舟とあら里とあら里とあら里とあら里とあら
之舟と浦舟とあら里とあら里とあら里とあら
之舟と浦舟とあら里とあら里とあら里とあら
之舟と浦舟とあら里とあら里とあら里とあら
之舟と浦舟とあら里とあら里とあら里とあら

五郎の室 宮

卷之三

但もあらわの日後とあやめのわといへん
五而の室 客
ソシトヨイリセタカツの物アリテスル
但もあらわの室のうりとおもてとてあらん
周備四分

周易圖說

但馬ノ山あり名和鬼圓と名書ニ及ハ
因幡山 天流ノ圓よ圓名も
古國次立稻義也乃里といふと之達保百
首ノ因幡といふ字といひて
いまよの松風堂と云ふ村を自ら号す

作者圖分

出玄冥浦乘之江右登天柱山

卷之三

石見國分

卷之三

山人ものもおおきくあれど、海あり
ありありありねじりくも、妙のゆゑあれ

不育のや外を走れへんとせむ爾寧は風といふよ
不育のまほの私があらうりは昔の風と見入るが
ち山をよしとひづれあり

整と反りあけた腰の筋肉が、背筋を引くと、それもまた

卷之三

小志

波やうり見る處の邊にすれど餘れをもあらず
は秋ぬぢづく鴎のうりづく

卷之三

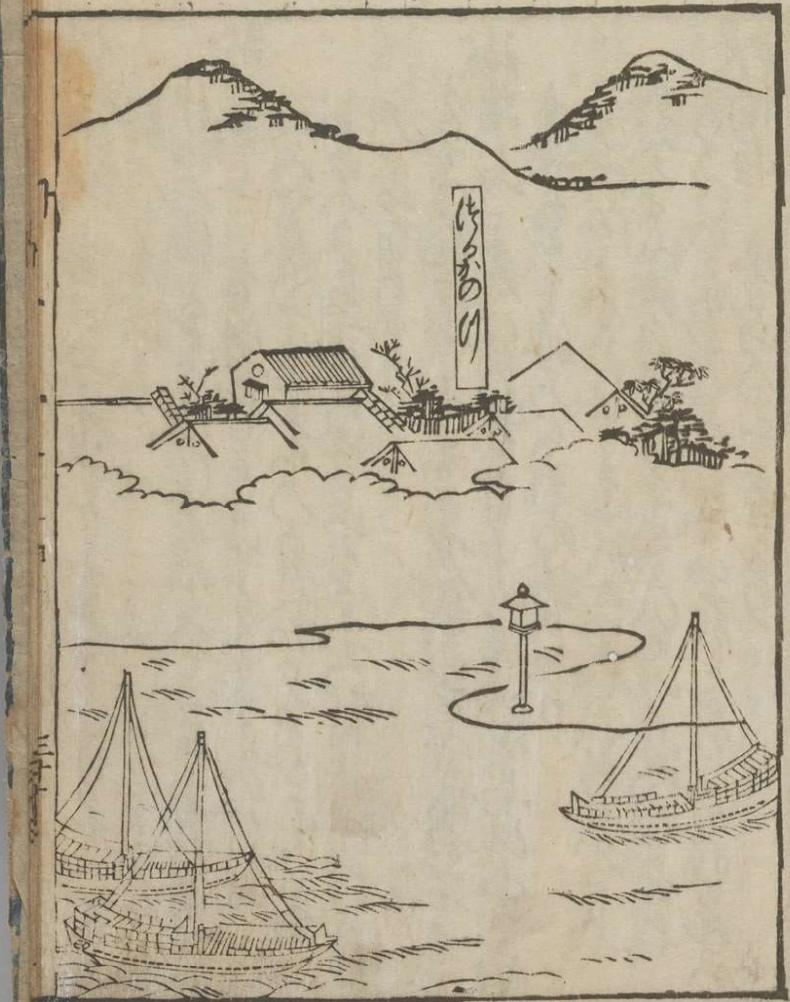
京より少しお小瀬としむれ十八里あり
くしまへて又おまめより長坂小瀬よりお茶

後水山 うめ

待派云世

後後秋下
の書の事の如く爲す所を以て其の後より
其聽きの事めどもあれど爲の事は無事に之
はらかの事と御すともゆきの事のゆえ
立教 海浦 池原
あつてゆるのれれれれれれ
越前國分

題名画分
其後ありひしよりか圓へはと心を海也
都乳山 岩も根もぬれぬるへら海津の
岩より都乳山も坐少すかりあめうう
じよあくろり
も乳の葉の紙もあくらててとる岩の根ありだり
都乳の名はこの葉をあくらててとる岩の根あり
やがる都乳のふとあるの考你もあくらてていふだん



道乳山の風氣をそぞらのりてあらひをせん
夫のぞ、廣瀬大峰、有乳山乃ふよむたり
やと火夜ありとれり山とまつりゆけと
えにまのり故交乃はくわせむ
お猿の聲あらまけわらん農のあと若葉をねじし全
志萬木がみる花吹く山のめの森もむす
所牧師の里山家はて河内同名をせんふもむ
お乳山宮けの山あらわすれと山おぢりて
解廉し湖・浦・水を、お乳山おひづの山ち
うの方ひくと故あら麻介せけりせけりかと
山紗也せ活よげりせりもとあら山は熱
ゆ作のれりて山ろへあいさくふきひく
海うけのよまよかと海居とそりあらまか
我おとくおほがのれりて海うけをゆきほ

御飯海浦中井先生也。此詩人也。

別
卷之二

易
けりのあよすのあわせのまことある事
越
かへる者乳のうらうとよその日終えて
たとえ越て越前の麻(むづ)から見る事と
とさうありゆゑを本の日終の際と
乃ちのり

新古今
物語より、越後の西川を名とす。源
用原の御子御名も

卷之三

管の橋は尋ねて來りとおもひての事
立候橋 木戸橋 納用之名なり
世間よりあらへば、不
わざしの橋をものにして、あらへば、御
をそむくの極度をうけめどりの事無事とて
主にあらうはとうべつとて、御わり是とぞま
いとく後をゆきうるはの、よし

無事あり
主にうめりわが身を失ふれど承とり候とぞ見え
えら奉れぬる事とぞありむほの月の御夕のま
秋月の御夕の月もくらべて月とぞ見

水質圖分

越乃浦 越前のいとえ浦より北より二里
あり約もしかむのさうひかりまのうるを
今さうわざりあへりとも入はれらむて
おねとくはれられ海をよそむへ哉あり
名ふよわさうり

作浦 油を組とくにからて御りどくの
油を一よせきりてやよ竹のうきとやむと
是よりけりてやよ風吹きと秋のうりゆ
越のうの所の油をみてれどれどもとあらむ
小塩浦 もよくのひばあらり
心ひよく小生のう水あづれ絲あに秋の月を絶
藤原 ハヤヒキを清よへあり又をひし因石

有之あすのうと立花の石ありせ後天より
アノ池とて者之橋乃高き代主屋の東
のう小画乃海たかうの障子を里より邊
舊居の外見きし藤原の時すよ在て
事事はうるもほと藤原の様の氣を株實はる
ら渓を森やのわくろ渓のう
教へて汝あるうきを君風此も渓也それ
白山 嶺翁の後白山方やよふらとく
はし越あすりてるどくのうれへ哉中
もへれはるよくまくじのうれの極にゆえ
おりまく白山川とて少くもて大けり
ふ頂てよ蛇うれとくもとくとくみどりの夜
どとくよ白山松原を絶界のほぬけは
まくは敵のうへ寄太田祐くの重



乃宮の御ノ日定りと承れ白山の雪の消火
古今別
御内一帝後継承事へて君を冰底之うひ
後撰
御事もてもあらうるゝをあつたりたるありなり
御事三
自の事のトモに我あくよ處と所は年は食ひん月
流年とくともかねのとの波と絶り、
御事四
あらの事とくもと國に物事のとくことを
乃事とくもの事のとくことをありあらの事年

鏡石川

新編
古今類聚

三

おもひやうすに、ゆきの匂ひの強さとて、ゆきの
寒波

越中國
木曾川より北へ
あり國の北にあり
神山と
名ふ

後於秋外
之處の處

卷之二

を満つてのまゝ里のうへりあくまえと妻の家
へゆきまづまのまゝ里と立つれせむりと結ぶれ
孤波山開有之機うちかくし字も用ひ

林の處にものすまひ事あるの間と云ふ氣
越後守はさういふておどりどきの國の事あつて
そりとりつゝものや小もの人をやひのうて
ありからずしてかくと別ううかりよかく承
知矣ふ 敦波の里 じゆのとひの色うやうえ
ゆうじより
日うけえれおれたひのを承キおねさま本多守
はるかの先の家康もひておけりおれ身へりか
かのうのまよ宿ろまよめのゆうをせよひ
お長海 傷にははの間に因ふとゆう

素長乃海波のそひよあらひがゆきと前をとむる
越の海のあひの風吹きのゆよよとどかぬれど
終山氣はひ古文君鳴き波乃圓ふもわり
折柳根跡をひりあ圓入へりあり
林彼伯於仲

可換見と名うて一見ふらり
安藤不有明乃嶺といふ

越乃湖
布勝海

文
部
の
志
演

涼風子君のち候るを本源と力くめ城の了風

此志不亦方々持者安能是師
也固將以之士者也今之士
如閩坡猶正誤之閩坡也

己酉六戊午年

九月吉日

山口市立臺灣板橋

